

## ※ 茶碗 ※

茶の湯の茶碗には非常に多くの種類を持ち変化に富んでいる。

茶碗の焼かれた窯をたどるとすれば、すべての窯をあげればならないほど全国いたるところ、どんな窯でも茶碗は焼かれていると考えた方がいい。

茶碗は主客と共に直接手に触れ、そして口にして茶を飲んできたもので、ほかの道具にくらべてよりいっそう所持する人の愛情のこもったものである。それらは元々雑器であったり、茶を飲むためのものであったり、その生い立ちはさまざまであるが、茶人の心にふれ、大切に伝えられたものが多い。それらの主な物は中国、朝鮮、和物に大別される。

### 中国の茶碗

**天目茶碗** 宋代（鎌倉時代初め）に多くの日本人の禅僧が中国へ留学した。これらの学僧は、浙江省の天目山の禅寺で多く学び、その際に抹茶の法とともに持ち帰ったのが建盞であった。やがて日本ではこの建盞を天目山の茶碗ということから、略して天目と呼ぶようになった。天目と呼ぶのは、のちに建盞以外の玳瑁盞などもそういうようになり、さらにその形をしたものを日本で作った物でもそう呼ぶ習慣になった。建盞天目は、福建省の水吉鎮で宋代に大量につくられた。口ペリがやや締まり、底が厚く、高台の内側の削りは浅

く、木地は鉄分が多く、黒褐色でかたい。茶碗のすそから下は、くすりがかからず、流れたくすりがたまる。建蓋のくすりはときに窯の中で偶然の火かげんで窯変を生じて、美しい自然の模様を呈するときがある。その代表的なものが稲葉天目や大徳寺龍光院の曜変天目である。この窯変の一種で、油のしずくを水面にたらしめたような斑点が一面に出たものを、油滴天目と呼んで珍重した。

玳瑁蓋も宋代に、江西省吉安府吉州窯である。素地は灰黄色で、黒飴色のくすりがかかり、その上に黄褐色のくすりを二重かけにしてある。その黒と黄の斑点がちょうどべっ甲のように見えるので玳瑁蓋と呼ばれている。つくりは建蓋よりやや薄手で、内面に尾長鶏や梅花、吉祥文字を黒抜きにしてあるもの、また木の葉の模様を出しているものなどがあり、それぞれ梅花天目、木の葉天目と屋ばれしている。

## 青磁茶碗

**砧青磁** 古く日本でも珍重された茶碗で、砧手といって、南宋時代に、浙江省でできた青磁が最上とされた。

**珠光青磁** 南宋時代、浙江省の徳清後窯で焼いた。砧青磁と違って大量にできた下手物である。村田珠光がこのくすんだくすりの色の中に、茶の美を見いだし愛好したところからこの名がある。

**人形手** 内側に人物などの模様の押し型があるのでこの名がある。

くすりはびわ色であり、厚手である。珠光青磁と同じく下手物であるがこれは明代のものである。

**染付** 白磁の素地に、コバルトを主成分と絵の具で模様を書いたものを日本で染付と呼ぶようになった。初期のものを古染付と呼び、雲と楼閣模様がある。雲堂手がよく知られ、明代末から清代初期にかけて、日本向けの茶器としてつくられた祥瑞を染付の中の最上位におく。祥瑞は、純白精良の磁器の素地に、染付の色は明るく青藍色を呈し、全体に気品のあふれた美しさを特徴とし、茶碗にはたいてい「五良大甫呉祥瑞造」の銘がある。同じ明代末から南の福建省で焼かれたもので、染付より少し下手になるものを呉須と呼んでいる。その他、赤絵と呼んでくすりの上に赤、緑などの色くすりの模様を焼付けたものや、河北省の磁州窯で宋代以降に焼かれた絵高麗などがある。

### **朝鮮の茶碗**

**象眼青磁** 高麗末期に南朝鮮で焼かれたもので、だいたい筒形で銅の前後に丸紋の象眼がある。くすりは高台裏までかかり、厚手でくすり色もさえないものであるが、その侘びた味わいを賞したものである。

**井戸茶碗** 茶の湯の茶碗の中では、まず第一のものとされている。

井戸茶碗は李朝の初期（室町時代前半）ごろに、南朝鮮で焼かれた雑器であったものであるが、茶人がこの枯淡の美を見いだしてから競ってこれを賞賛し、愛蔵してきた。名称は奈良の豪族井戸氏の所持したのが起こりであると言われるが定かではない。中でも大井戸と呼ばれ、口径が大きく、その姿が堂々としているものが代表的なものである。国宝の喜左衛門井戸、筒井筒、細川、有楽などはすべて名物手に属する。井戸茶碗の見所には次のようなものがある。

素地は赤褐色の土で、びわ色のくすりが高台まで全体にかかり、やや厚手で荒いろくろ目がある。茶だまりには重ね焼の跡が見られ、高台は大きく高く、高台わきや内部には「かいらぎ」というさめの皮状にくすりがちぢれている。高台わきは「わきどり」と言って、削り取ってあり、高台が竹節のような形をしている。ほかに井戸茶碗の中で、くすりの多少青めにできあがっているものを青井戸、少し小降りのものを小井戸と呼んでいる。

また井戸に近いもので、井戸風ではあるがくすりも素地も、少し味の違うものを、井戸のわきのものと言う意味から井戸脇茶碗と呼んでいる。

**熊川** 釜山の近郊、熊川の港から日本へもたらされたので、地名を日本風に呼んでこの名が付けられた。李朝中期の窯で、素地は白目

の細かい土で、薄いびわ色の透明くすりがかかっている。同じ系統に鬼熊川、玉子手などがある。

**堅手** 李朝の白磁系統で、手ざわりが堅いところからこの名がある。李朝の初期から中期にかけていろいろとあり、古いところを古堅手、古堅手で紫色のしみのあるのを雨漏手と呼び、また釜山の近く、金海の窯で焼いたものを金海堅手と呼んでいる。

**粉引** 表面に粉が吹いたように白土を化粧かけしているのでこの名がある。李朝の初期、全羅南道の産である。

**三島** 素地に同じ小紋を型で連続に押しした細かい白象眼が全体にある。模様がちょうど三島ごよみに似ているところからこの名があるといわれている。古三島、花三島、三作三島、礼賓三島などがある。井戸と並んで早くから日本に渡来し、珍重された。

**刷毛目** 忠清南道、鷄龍山で焼かれたもので、三島とは同年代と考えられる。古刷毛目、無地刷毛目、絵刷毛目に分けられる。

**斗々屋** 堺の商人斗々屋所持からでた呼び名といわれる。平茶碗に近いものが多く、素地の薄茶色に半透明のくすりがかかり、青い火変わりの出たものが喜ばれる。

**伊羅保** 素地が砂混じりで、手ざわりがいらいらとしているのでこの呼び名があると言われる。侘びた味を持つところから、茶人の賞でるところのもので、大ぶりの古伊羅保のほかに、釘で彫ったよう

な跡がある釘彫伊羅保、また黄伊羅保などがある。

**呉器** 形からきた名称で、木椀の御器に似ているのでこの名がある。椀形で、高くてすその開いた撥高台が特色である。だいたい大ぶりでその姿は端正である。室町時代に来日した朝鮮の使臣が、大徳寺を宿舎とし、帰国に際し持参の茶碗をおいていったことから大徳寺呉器ともいいその中で特に上作で、小振りで総体的に赤味のかかったものを紅葉呉器と呼ぶ。その他にきり呉器、尼呉器などがある。

**御本** 日本での需要からお手本（切形）を朝鮮に送って、釜山その他の窯で焼かせたものをはじめ、茶人の好みで焼かせたものもある。たとえば、古田織部の切形によるものは織部御本とも呼ぶ。この織部御本は朝鮮から御用船御所丸で持ち帰ったので別名を御所丸茶碗とも言う。

## **国焼茶碗**

国焼茶碗をその起こった系統から見ると、朝鮮系の九州諸窯、瀬戸系の美濃諸窯、京都系の諸窯、その他の諸窯に分類される。

### **朝鮮系の九州諸窯**

文禄、慶長年間にかけてあった秀吉の朝鮮の役は、焼物を焼く陶工を多く日本に連れ帰ることとなり、彼らは九州や山陰方面の大名に召し抱えられ保護され、定住し焼物を焼くようになった。

**薩摩焼** 島津義弘が連れてきた陶工を、大隅の帖佐、薩摩の苗代川におき窯を築かせて今日に至っている。最も古い作品は数が少なく、残っているのを見ると、だいたいは筒形で釉薬が二重にかけてあり非常に渋いものである。くすりは大別して、黒いものと白いものがあり、後に白い方には、金彩の美しい赤絵を施すようになった。

**八代焼** 細川忠興が小倉城から熊本に移った時、これに従った上野喜蔵親子が、八代の高田に移って焼いたもので上野焼の器物に模様を白く象眼して焼いたものである。

**小代焼** 加藤清正の連れ帰った陶工によるもので、茶碗は黒茶色の釉薬で、朝顔形に開いた形のものが多い。

**唐津焼** 朝鮮の役ののち、もっとも多く陶工を連れ帰ったのがこの地方で、名護屋城（肥前）は秀吉の根拠地であった。築かれた窯数は百数十にも及ぶという。窯数が多いためにそこで焼かれた茶碗の種類も多種多様で、絵唐津、奥高麗、斑唐津、朝鮮唐津、瀬戸唐津、三島唐津などがある。この中でも奥高麗が最古のものと考えられる。

**高取焼** 黒田長政の保護のもとで窯がつくられ、朝鮮の陶工八山親子が焼いた。それが福岡県直方市にある鷹取山山麓であったところから、高取とその性を改め、その名で呼ばれている。遠州（小堀）七窯の一つに数えられ、茶入、水指等の名品が多いが茶碗は少ない。

土は細かくて細密であり、なめらかな釉薬がかけられる。

**上野焼** 唐津から細川忠興によって招かれて窯をつくった上野喜蔵によって小倉城下で焼かれた窯である。古い上野焼は唐津にも非常に似ているものが多い。

**萩焼** 毛利家おかかえの陶工、李勺光、李敬によって萩市の周辺で茶碗を専門に焼いた窯である。やはり古いものは唐津風のざらついた土をしているが、江戸中期頃からはしだいに萩の土をもって独自の作風になっていった。大別すると二つの窯があり深川窯、松本窯という。

### **瀬戸系の美濃諸窯**

朝鮮系の諸窯よりも古く、まず加藤四郎左衛門が中国から学んだ技法で、瀬戸の北部に窯を築いた。それ以後、その兄弟など多くの人の力で数十の窯がつくられた。

**瀬戸黒** この美濃地方の窯で最初に焼かれたのが瀬戸黒である。全体に変化に乏しく真っ黒な釉薬がかかっている。瀬戸黒は、窯の中で白熱化したものをつまみ出して水につけて急冷するので、一名引出黒とも呼ばれる。

**黄瀬戸** 黄瀬戸は茶碗としではなく食器として作られたものを見立てたものが多い。古いところでは筒形が多く、胴に唐草などの彫りがある。瀬戸黒、黄瀬戸は利休好みと伝えられている。



**志野焼** 長石の粉を釉薬としてかけて、日本の焼物としては初めて白い色の焼物がつくられた。古田織部の好みとしてつくられている。鉄ぐすりで胴に絵を描いたものを絵志野と呼び、ねずみ色の釉薬に絵模様を白く出した鼠志野や、赤志野、紅志野がある。

**織部焼** 瀬戸黒のような黒の釉薬が全体にかかり、胴の一部分に一、二カ所白く窓のように抜かれてそこにさまざまな模様が描かれている。後、緑色の釉薬で赤褐色の絵があるものがある。

形は織部の好みとされ、ゆがんだ沓形が多く、志野よりも硬い土が使われている。おもに慶長年間から寛永年間に焼かれた。

絵瀬戸、瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部など古い時代の窯はほとんどが滅んでしまった。

### 京焼系の諸窯

江戸時代初期に野々村仁清によって、陶器に上絵付を施すことが考え出され、茶の湯に適した茶碗がつくりだされた。この仁清の焼物が京焼きの基本となり、京都ならびにその近郊の、膳所、赤膚、淡路、舞子などにやわらかな陶器の影響が見られるようになった。

**仁清焼** 瀬戸で焼物の法を学び、仁和寺の門前に窯を築いた仁清は、ろくろの名人であった。金森宗和の指導によってあらゆる茶器を焼いたが、中でも後人の追隨を許さないものは、一度焼いた上に五彩を施した赤絵である。

**乾山** 画家尾形光琳の実弟乾山は、仁清に学びその作品は楽焼風の  
もの陶器のものとなる。琳派風の大まかな大胆な絵付を特徴として  
いる。

**木米** 京都の陶工は、作陶と同時に絵付けにすぐれた腕をふるった。  
その一人に青木木米がいる。朝鮮物の写しからいろいろな写し物を  
制作した。後に加賀藩に召され九谷焼等の指導にも力を入れた。

**道八** 高橋家の二代。仁阿弥道八はことに仁清の写物がすぐれ、乾  
山風のものも焼いている。讃岐や紀州にも召され唐物写しや高麗の  
写しをつくった。

**永楽** 西村（永楽）善五郎保全は土風炉師の家系であるが、唐物、  
高麗物の写しに秀でて、後に金襴手などの磁器物もつくった。紀州  
家にも招かれ永楽の金印を受ける。文政年間から天保年間にかけて  
の名工で、今の永楽家の基礎を築き上げたのも保全である。

**栗田焼** 京都の栗田口にもかなりの窯があり、仁清の写し物を主に  
焼いていた、これらを総称して栗田焼という。

**朝日焼** 京都の宇治で、古くは遠州（小堀）七窯の一つとして茶入  
を主に焼いていたがのちに茶碗もつくられた。主として御本茶碗の  
写しを得意とし肌は薄紅色で砂混じりの土が多い。

## その他の諸窯

備前、伊賀、信楽、丹波の四窯は瀬戸系とおなじく古くから窯があり、桃山時代から江戸中期頃までは名碗を多く焼いていた。

**備前焼** 備前の焼物が他の窯と違う点は、土を焼き締めるだけの陶器で、釉薬をかけないところにある。花入、水指等茶の湯の道具を数多くつくっているが茶碗は数が少ない。

**信楽焼** 水指、茶入などの茶の湯の道具をつくっていた。桃山時代の茶人の好みや指導によって厚つくりで、重厚な感じの物が焼かれた。紹鷗信楽、利休信楽などとも呼ばれ茶人には喜ばれた。

**伊賀焼** 室町時代末桃山時代にかけて、花入、水指、茶碗などが焼かれた。茶碗は少ないが名品が残っている。

**丹波焼** 古い歴史をもつ窯の一つで、もとの多くは穴窯といって傾斜地の土をくりぬいてつくった窯であった。黒っぽい土の上に、わびた色の釉薬がかかり、粗野ではあるが力強いものである。多くの名品が生まれたのは江戸時代中期までである。

**楽茶碗** 楽茶碗は茶の湯のために生まれてきた茶碗であり、言い換えれば茶の湯には最も適した茶碗である。楽焼は、朝鮮からの帰化人阿米夜が京都で、加茂川の石や日の岡の石のをくすりにし、聚楽土や岡崎の土を用いて、ろくろを使わず、鉄へらや小刀で削って、手作り式の茶碗をつくったのがはじまりである。その子の長次郎が

その技法で利休の指導のもとに、信長、秀吉の保護を受けて焼き、今日の楽の基礎を築いた。このときには、今焼、京焼と呼ばれた。長次郎は利休のとりなしで聚楽第内に窯を築き、数々の名品をつくりあげた。時代が変わり、子の常慶は細工物を得意とし、香炉くすりに特色がある。秀吉から天下一の称号を受けて、黄金の「楽」の印を拝領した。これからのち楽焼と呼ばれるようになった。以後代々、字体を変えた楽の印を作品に用いている。

**大樋焼** 楽家四代の一入の弟子。仙叟に伴われて加賀前田藩に招かれる。その後、城下の大樋村に窯を築き大樋焼を名乗るようになる。作品は飴くすりをつかい侘びたものである。